

氏名(本籍)	おくむらゆみこ 奥村由美子(滋賀県)		
学位の種類	博士(医学)		
学位記番号	博甲第4837号		
学位授与年月日	平成20年7月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	回想法がもたらす認知症高齢者とスタッフへの効果に関する研究		
主査	筑波大学教授	医学博士	松崎一葉
副査	筑波大学教授	保健学博士	安梅勅江
副査	筑波大学講師	博士(医学)	川西洋一
副査	筑波大学講師	博士(医学)	岡田昌史

論文の内容の要旨

(目的)

回想法は、認知症高齢者への介護や臨床の場面で積極的に用いられているが、エビデンスの蓄積が不十分であるとされている。従来の認知症高齢者への回想法は、長期間で実施されることが多いが、より少ない回数でも有効に実施できると介護や臨床の現場においても様々な期間設定により導入できる。また、認知症高齢者への回想法の効果評価についてもまだ確立段階には至っていない。さらに回想法は、認知症高齢者への介護にかかわるスタッフに効果をもたらすことにも注目されているが、まだその報告は少ない。

そこで、本研究では、回想法の短期間実施による認知症高齢者への評価方法と効果、および、回想法の実施にかかわる介護スタッフへの効果について検討することを目的とした。

(対象と方法)

① 回想法がもたらす認知症高齢者への効果

対象は、病院や高齢者施設に入院、入所あるいは通所している女性のアルツハイマー型認知症高齢者である。まずセミ・クローズド形式の回想法を週1回、計5回実施した。効果評価には、毎回終了後に4つの語想起課題を実施し、回想法非実施群との評価結果と比較した。次に、異なる言語的介入による効果を比較するために、回想群に週1回、計5回のクローズド形式での回想法を実施した。同時期に同施設において日常会話によるグループ(日常会話群)を実施し、両群に同様に、語想起課題とその他の評価スケールにより評価を行った。最後に、効果の比較を行えなかった参加者をあわせ、回想群、日常会話群、非実施群という3群での語彙数の変化を比較した。

② 回想法がもたらすスタッフへの効果

認知症高齢者への回想法グループの実施にかかわったスタッフの、セッション実施にかかわる前後の認知症高齢者および健常高齢者のイメージを調べた。対照として、日常会話グループの実施にかかわった群と通常の介護業務のみを行った群を設定し、同様の調査を実施した。

(結果)

① 回想法がもたらす認知症高齢者への効果

回想群と非実施群の比較では、回想群は5回参加後に初回に比べて語想起課題における語彙数が有意に増加していた。日常会話群の比較でも、回想群では5回参加後には初回に比べて語彙数の有意な増加が認められ、また、毎回のセッションを楽しみ日常生活場面でも肯定的変化が認められた。さらに3群の比較でも、回想群では語彙数が有意に増加していた。回想群では、認知機能の違いを問わず語彙数は増加することや、認知機能の違いにより想起される語彙数には差があることが示された。

② 回想法がもたらすスタッフへの効果

イメージ調査の結果から、回想の実施にかかわったスタッフでは、認知症高齢者の内面をあらわす「円熟性」のイメージに有意な肯定的変化が認められた。

(考察)

① 回想法がもたらす認知症高齢者への効果

認知症高齢者が短期の回想法に参加することにより、語彙数の増加が認められた。語想起課題は簡便であり、回想法の効果評価としても客観性があるものとして活用できると考えられた。また実施回数は、通常よりも少ない実施回数によっても語彙数が増加するという結果がみられ、認知症高齢者の生活の中に短期間でも導入しやすく効果もみられる可能性が示唆された。日常会話群との比較から、近時記憶障害のあるアルツハイマー型認知症高齢者にとって、過去を懐かしむ回想の方が想起されやすく、回想群の語彙数の増加や「楽しさ」といった面に働きかけたのではないかと考えられる。また、その効果は、回想法場面だけではなく、日常の場面にも波及する可能性が示された。

② 回想法がもたらすスタッフへの効果

回想群のスタッフにおいてイメージが変化していた「円熟性」は、短時間の表面的なかかわりでは気づきにくい。回想法の実施にかかわることにより、認知症高齢者の内面性への理解を深め、認知症高齢者へのイメージが肯定的に変化し、良いかかわり方やその高齢者の新たな側面に気づくことの出来る可能性が示された。このように、認知症高齢者への回想法の実施と、介護スタッフによる、より質の高いかかわりという両側面からの支援によって、認知症高齢者の日常生活が活性化されることが、回想法の意義を深めるものと考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、近年、認知症高齢者の介護や臨床場面において使用されるようになってきた回想法に関する科学的エビデンスを検討したものである。回想法は、簡便に実施でき非侵襲的であることから、実践的には有用とされてきたが、その方法と効果について詳細な検討をした研究はほとんどなかった。本論文は本人の臨床経験に基づき、実証的な研究を行い成果をあげたものである。この論文により、特に認知症介護の現場において、今後は精緻な治療的介入と支援が展開されるものと期待でき、その点から高く評価されるべきものである。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。